The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	研究会参加記１ ： 文化運動研究の視点から
Author(s)	澤田, 正太郎
Citation	日本学報. 2014, 33, p. 147-149
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27058
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

研究会参加記１：文化運動研究の視点から

澤　田　正太郎

この10年あまりのあいだに、1950年代の日本社会に対する歴史的関心がにわかに脚光を浴び、論究・アプローチ・資料、ともに膨大な業績が蓄積・発掘されてきた。とりわけ当時のサークル運動に関しては、その実態を解明する作業が多面的に取り組まれ、それらは雑誌の特集や復刻版の刊行、回想記・研究書の出版など、多くの成果となって実を結んでいる。かつては、総力戦から戦後民主主義へと劇的な転換を遂げた1940年代と、社会運動や高度成長の隆盛に彩られた1960年代との狭間にあって、学問的な関心からは打ち捨てられた「谷間の時代」とみなされた1950年代が、戦後日本の社会意識・政治体制を規定してきた「五五年体制」構築前夜の、未分化で可能性に満ちた時代として、急速に多分野の研究者から注目を集めるようになったことには目をみはるものがある。

戦後文化運動合同研究会は、このような動向のなかで、2008年から継続的に開催され、東京を始め、福岡、広島、大阪などで、それぞれの地域の文化運動を調査する複数の研究会がともに成果と議論を共有する場として、回次を重ねてきた。2013年は、11月２日と３日の二日間にわたって行なわれ、そのうち二日目の午後の「セッション３」は、日本学方法論の会との共催となっていた。一日目（「セッション１」）は、「生活記録と〈運動〉」のテーマのもと、占領期における『思想の科学』の社会的・思想的意義についてや、1950～70年代の長崎の被爆者（証言）運動の位相について、発表とコメント、議論が行なわれた。二日目の午前（「セッション２」）は、近業の書評として、水溜真由美『『サークル村』と森崎和江』、中谷いずみ『その「民衆」とは誰なのか』が取り上げられ、書評報告と質疑の場が設けられた。会の全体を通じて、大学教員や大学院生だけでなく、資料館職員やサークル運動の当事者、出版者といった人々が参加する混成的な場となっていたのが印象的だった。ディスカッションのなかでも、歴史学や社会学、表象批判などの視点に立った研究者からの発言だけでなく、教育学や教育運動・社会運動の立場からの見解、当事者からの声、日本人ではない位置からの意見など、多様な切り口と問題意識から、活発に感想や質問が出され、参会者にとって「サークル運動」が、単に歴史的な研究対象としてのみあるのではなく、現在に繋がる問題として、あるいは知的・運動的共同性のゆるやかな形成をめざす（この研究会のような場じたいの）実践的な範例としても感得されていること

を感じさせられた。

そして二日目の午後（「セッション３」）。昨年の「日本学方法論の会」でのシンポジウム「被爆体験とその表象」での議論も踏まえるかたちで、「グローバル冷戦と文化―広島／日本／東アジアから考える―」とのテーマのもと、本号収録の報告とコメント、ディスカッションが行なわれた。鳥羽耕史、川口隆行両氏の報告とも、レジュメはすでに文章化されたかたちになっており、専門外の者にも意図や論点が明快な、あとのディスカッションの場へと自然に議論が開かれていくような内容だった。徐潤雅氏、キアラ・コマストリ氏のコメントも、各自の研究テーマの問題意識を踏まえつつ、一方は韓国における東アジア研究の現況から、一方はイタリアの近現代の経験から、冷戦期の日本の文化運動の多面的な位相を照らし出すものになっていて、セッションに立体感を与えることに成功していた。セッションの冒頭で企画者である宇野田氏が、「戦後文化運動をめぐる論点や成果を、研究会の外部の人々に対して開いていく必要があるのではないか」と問題提起したように、1950年代の文化運動、あるいはひいては戦後日本の文化運動・社会運動をめぐる研究の枠組みが、いまや次なるステージへと移行しつつあることを実感させるセッションだった。日本学方法論の会との共催という意図の一半も、異なる関心や異なる方法論との“セッション”という点にあったのだと理解したい。個人的には、宇野田氏が述べる、「東アジア冷戦／朝鮮戦争下の日本の左翼文化運動」についての「共時的相対化」と「通時的文脈化」が必要なのではないかという提案が刺激的だった。それは、今回のセッションでは広島の被爆体験（に関わる表象・運動）に即して議論されたものの、より広く、同時代の文化をめぐるナラティヴおよび運動にも敷衍できる議題であろう。生活を記録するとは、また、歴史的な体験を当事者が記録するとは、（一方では冷戦体制という世界的な「共時的」体験のなかで、他方では総力戦から占領を経て高度経済成長へとシフトしてゆく日本社会の「通時的」体験のなかで）どのような意味をもった営みであったのであろうか。両大戦間期から戦後期にかけての民俗学運動（とその社会的影響）に関心を抱いている筆者としては、（必ずしも「左翼文化運動」に限定しないかたちで）日本の文化運動の実態をどう捉え、どのような射程のもとに描いていけるか、思考を触発されるものがあった。とりわけ、生活綴方・生活記録の運動・実践と、郷土教育・民俗誌記録の運動・実践とが、どのように重なり合い、どのように違和するものであったのか、それを戦中から戦後への運動空間・社会政策・社会意識の変遷を睨みながらどう位置づけることができるのか、（合同研究会の全体を通じて）問題意識を新たにさせられた。最初に述べたように、当初、1950年代の文化運動への注視は、戦後の中心的な歴史観・社会観に異議申し立てをする意図を内包していた。いまやそれは、あらためて1940年代／1960年代との連続／断絶をどう捉え返すのかという問題、および世界史的な同時代性をどのように設定し直すのかという課題へ

と発展していっているのだと感じる。と同時に要請されているのは、セッションでも話題になったように、戦後文化運動に焦点を当てたそもそもの「初心」をあらためて再確認するとともに、その問題意識や諸成果をいかなるかたちで異なる研究領域や教育・運動の現場などと共有できるものにしていくかということかもしれない。そのような課題と希望を感じさせられた研究会であった。

（さわだ　しょうたろう　大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）